



年 組 名前

# 道新でワークシート

## デジタル空間での市民教育に注目

### デジタル・シティズンシップ教育で学ぶ領域

- メディアバランス**  
メディアをバランス良く利活用するための約束
- プライバシーとセキュリティ**
- デジタル足あととアイデンティティ**  
ネット上の自分の情報や記録の影響と社会への責任
- 対人関係とコミュニケーション**
- ネットいじめとオンライントラブル**
- ニュースとメディアリテラシー**  
偽情報を読み解くニュースリテラシーと人権教育のメディアリテラシー

小中学生にパソコンやタブレットといったデジタル端末を1人1台配備する「GIGAスクール構想」に伴い、インターネットという公共空間で子どもが責任を持って行動する方法を学ぶ「デジタル・シティズンシップ（DC）教育」が注目を集めている。

以前はネットの危険性を強調し、利用を制限する傾向にあった。しかし情報通信技術（ICT）が生活に浸透。教育関係者の中には「従来の教育では子どもを巡るデジタル環境の変化に対応できない」との実感があり、普及が進む。

「もし自分が当事者なら、どう反応したか考えてみましょう」。DC教育を導入する島根県雲南市の海潮中学校で6月、ヘイトスピーチを題材にメディアリテラシーを学ぶ授業が行われた。生徒たちはヘイトスピーチの定義や規制について説明を受けた後、架空の人物カズオの物語を基に話し合った。カズオは交流サイト（SNS）の差別的な投稿に「同感」と反応したこと

で大学の合格が取り消しになる。

もし自分が差別される側なら。一対一でメッセージを受けていたら。異なる立場や状況を想像し、互いの意見を共有する生徒たち。講師を務める今度珠美さんは「メディアリテラシーは情報を疑うだけでは不十分で、思い込みや感情と距離を取り、正確な知識を持って分析する必要がある」と説明。さらにDC教育では、問題のある投稿を見た場合に状況を変えるため何ができるかを議論することも重要だと話す。

デジタル空間の市民教育であるDC教育は1990年代以降に欧米で発展。当初はネットに潜む危険の回避が中心だったが「怖がら

# ネット社会生きる力育む

## いじめやヘイトスピーチ 真偽見極める方法学ぶ

せる方法で教えてもトラブルは減らない」との声を受け、子どもがデジタル世界の仕組みを理解した上で法的・倫理的に振る舞う能力を育む内容へと変化した。

米国では幼稚園から高校まで成長段階に合わせ、プライバシーの守り方やネットいじめへの対応などを系統的に学ぶ実践プログラムが普及する。

大阪府吹田市立教育センターの草場敦子所長は「共感と尊重を重視する点が人権教育にも通じている」とDC教育に着目、全国でもいち早く取り入れた。小中学校で年間の指導計画を作成。保護者と学びを共有するワークシートを配布し、教員向けの相談会も実施している。草場所長は「これから生きる子どもたちは世の中の仕組みを学ぶのと同じように、ネットの裏側や真偽を見極める必要がある」と語る。

メディアリテラシーに詳しい法政大の坂本旬教授は、子どもが自分で考え、身を守る力を養うのがDC教育の特徴と指摘。「1人1台端末を導入するならば、家庭だけに責任を押しつけず、善き使い手を育む教育が学校現場には求められている」と話している。

2022年7月26（火）夕刊 全道版 1ページ（記事は再編集しています）

①デジタルシティズンシップ（デジタル技術の利用を通じて、社会に積極的に関わり、参加する能力）教育で学ぶ領域であやまっているものをア～オから選びなさい

- ア メディアバランス
- イ プライバシーとセキュリティ
- ウ 対人関係とコミュニケーション
- エ ネットいじめとオンライントラブル
- オ さまざまな物とインターネットへの接続

②1990年代以降に欧米で発展したデジタルシティズンシップ（DC）教育の課題とは何か書きなさい。

③SNSを使うときに気をつけなければならないことを書きなさい